

カミヤのちやん興味さん



田

# おっちゃん 興味しんしん I

田辺聖子



文藝春秋

田辺聖子（たなべ・せいこ）

1928（昭和3）年3月27日、大阪に生まれる。

1947年、樟蔭女子専門学校国文科を卒業。放送作家などを経て、1964年、『感傷旅行』<sup>センチメンタルジャーニー</sup>で第50回芥川賞を受賞。著書に、「女の長風呂」「イブのおくれ毛」「文車日記」「甘い関係」「私的生活」「隼別王子の叛乱」「ああカモカのおっちゃん」「浜辺先生 町に行く」など多数。

カモカのおっちゃん興味しんしん！

昭和五十三年十一月二十日 第一刷

定価八五〇円

著者 田辺聖子

発行者 榎原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三  
電話〇三二六五・三二二

印刷 共同印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁の場合は  
お取替致します

© Seiko Tanabe 1978

printed in Japan

カモカのおっちゃん興味しんしんⅠ／目次

# I

|              |    |
|--------------|----|
| おっちゃん中年医学を論ず | 10 |
| 野球オンチ        | 15 |
| 男のあと始末       | 20 |
| 三重マル         | 25 |
| パンダは女        | 30 |
| 男の原型         | 35 |
| 反応の問題        | 40 |
| 女のストライキ      | 45 |
| おタカラ         | 50 |
| 昔の名前で出ています   | 55 |

## II

説論

格言は悪の根源

黒いセーター

文明の興亡

風林火山の女

人生のムダ

中年の春

大極殿

そんなつもりと違います

間隔位

62

67

72

76

81

86

91

96

101

106

### III

とっさの一言

112

うどんの純潔

117

あそび

122

必然性ごっこ

127

ライへ婆さん

132

固定観念

136

裏街道

141

大クダ連

146

男の涙

151

おっちゃん煙草を擁護す

156

## IV

ポスト・カモカ

色男

正論

女兵

お互いを知る

心の支え

女学生

ナマと乾燥

タビネズミ

男のスリーS

162

167

172

177

182

186

191

196

201

206

# V

女の三楽

212

女の真剣 男の真剣

217

男の戦争

222

おらぶ

227

ドングリのぶっかりあい

232

私憤・公憤

237

シロウト クロウト

242

ああ国民榮譽賞

247

女流イロイロ

252

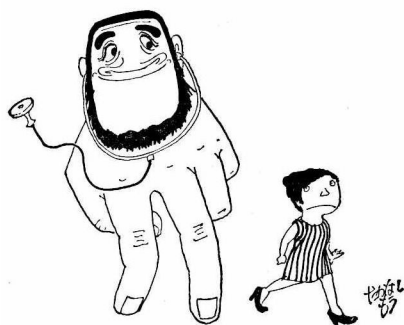
復縁さわぎ

257

カモカのおっちゃん興味しんしん  
I

装帧  
高橋  
孟

# I



## おっちゃん中年医学を論ず

朝晩の風は、秋めいてきた。

秋、とくると必ず新聞には、読書、スポーツ、と出合い物のように出てくるが、読書はよろしい、大いにお励み下さい、業界股脈いんしんの一助ともなろうから、私は大いにおすすめする、しかしスポーツはどうか。

このあいだマラソンをやつて、まだ五十を出たばかりの会社の社長さんが急死したではないか。

私はマラソンにつき、以前に、うさんくさい印象であると書いたことがある。どうも、あんな急激な運動、しかも日本人ときた日にはすぐ特攻精神を発揮し、撃ちてし止まんになり、精神一到何ごとか成らざらん、何のこれしき、ここで倒れては男がすたる、という決死の勇にエスカレートしてゆく、そのさま右翼に似たりけり。

私、今は昔、旧制高等女学校の花の乙女のころ、だだっ広くて向うは霞むような校庭を十周というマラソンを強要され、すっかりマラソンぎらいになってしまったの。尤も、足のわるい私は一周半めぐらいでダウンして、「精神がダラけてる！」と毎度叱られてたけど。

「ねえ、おっちゃん、秋になると、またやたらマラソンする人多いやろうけど、そしてなぜか、若者より、中・老年でやる人が多いけど、ほんとに体にいいもんなの？」

と私は、カモカのおっちゃんに聞いてみた。

ナニ、このおっちゃんとして、べつに医学の泰斗というのではないのだが、何しろ、聞いたら最後、知らん、といったことのない御仁。何でも自分なりのへりくつをつける。

「あ、マラソン、これは害。毒。やると死ぬ。やめた方がよろし」

おっちゃんは論断する。

「あんな運動やると、通常の人間には強すぎる。『足腰を鍛え鍛えてガンで死に』というのはここをいうのです。足は強うても、内臓はそれに伴わん。そんなことより、電車を一駅手前で下りて歩くとか、タクシーを使うところを電車やバスにして、駅の階段をあるく、信号を歩いてわたる、そんな方がよい。さすればクルマ公害排除の一助にもなる、というもの」

「フーン」

「大体、中・高年の健康についていうと、した方がよい、というより、してはならぬ、というこの方が多いようですね」

おっちゃんは、私が逆らわずに、ハハン、ハーン、ときいてると、しごくご機嫌である。やや夕暮れは肌寒くなつたゆえ、熱爛に、徳島から携え帰りしスダチを絞り入れ、スダチ酒などを飲む。

「いったい、何をしてはならぬのです」

「さきのマラソンもそうですが、中・高年の好むなるゴルフもしたらあきまへん」

「へー。どうしてですか」

「面白すぎて無理をする」

「フーン」

「マラソンするな、ゴルフやめよ、クスリ服むな」

「薬を飲まなきゃ死んじやうでしょう」

「西洋医学の薬は、日本渡来百年にしてすでにゆきづまつた。あんなもん、服んだらロクなことにならへん。内臓をなおすよりこわす。しかも朝令暮改、昨日までの良薬が、今日は毒薬やから使うな、といわれる。信用してられるかい、医者を」

「医者信じられないのなら、何を信じて養生すればいいの」

「おっちゃんを信じて下さい、救世主の声ですなあ」

「おっちゃんは思い上り、スダチ酒のんでにこにこする。」

「医者を信じないとあらば、入院してはならん、入院するな、輸血するな、切らせるな」

「オヤオヤ。西洋医学オールアウトですか？」

「全部パーとはいわんが、輸血はこわいことですぞ。輸血の弊害は、こら、もう、じつに多い。ああ怖、怖。」——それに、ワルイところがあるとすぐ、医者は、『切れ、切れ』という」

「さっぱりしちゃうでしょう、切ってしまったら」

「むやみやたら、体に切れ目裂け目を入れることはない。なるべく、そんなん、せん方がよろし」

私は、お医者さんのいうことをよく聞き、素直に守る方だから、そんなこといわれてもこまってしまう。

「これからは医者のことすべて疑え」

なんて、おっちゃん、無責任にいうけれど。

「酒は少量。これは必ず飲むこと」

「これだけはおすすめ品なのね、おっちゃん、自分に都合のええことばかりいうてる」

「仕事はホドホドに。しんどうなったら、すぐ休むこと」

「そう、うまくゆけばいいんだけどねえ」

と私は残念である。しんどくなりました、とこの欄を休んだら、編集長から大目玉である。

「痩せるな。なканずく一カ月で十キロなんていう愚かな減量は、以てのほか。痩せようとするのはよいが、必ず、五キロ十キロという大幅なことは厳禁」

「運動は全然、しなくていいの？」

「強いて運動するとすれば、その時にそなえて、腰の運動をせよ」

おっちゃんが「その時にそなえて」というと何か、おかしい。野坂昭如おにいさまが、「その時にそなえて」といわれると、これは食糧危機を指すのだな、と思うけど。

「じゃ、あのう、いろいろとはどうなのですか」

私は満天下の中・高年になり代り、聞いた。

「女色、色のみちはホドホドに」

おっちゃんはスタチ酒をすすってつけ加えた。

「体をいたわってなるべく指を使いなさい」

私、なんのことかわからない。